

住井するゑとその文学の里(二十九)

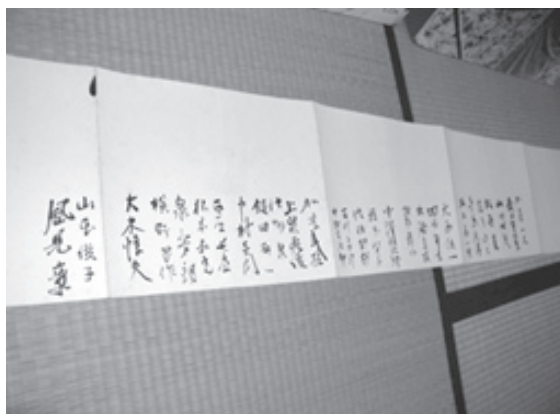
―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

牛久村に帰る犬田夫妻の送別会

昭和10年(1935年)の夏。友人たちが犬田夫妻の送別会を内幸町のレインボーグレルで開いてくれた。出席者は衆議院に議席を持つ風見章ら28人であった。送別会でせんべつが34円50銭集まった。このせんべつで犬田一家が、東京から牛久村大宇城中へ何とか脱出することができたのだ。(ちなみに当時東京市内で働く女性事務員の平均月収が39円余りであった)



送別会に出席した風見章ら28人の芳名帳

住井は初めて見る「牛久沼が地球のエクボのようだ」と思った

7月30日、犬田卯と長男章はトラックで荷物と一緒に旧水戸街道(国道6号)を北上した。トラック1台に一家6人分の荷物が積み込まれていた。当面の生活に必要でないものは処分したが、卯はこれだけは駄目だと、『エルクマンIIシャトリアンのフランス農民文学の本』を積み込んできた。章は尋常小学校6年生で級長を務め、将来は医者になり父のぜんそくを治したいと思っていた。彼は茨城県稲敷郡牛久村という片田舎に行くことは、その道を閉ざされるようで、移転に不満を述べたが、父のぜんそく治療のためという一言には逆らえなかった。

一方の住井は、午後の遅い時間に、長女かほる、二女れい子、二男充を伴って上野駅から「ポー」と汽笛を鳴らし、煙をいっばい吐きながらガタゴト走る蒸気機関車(SL)がけん引する鈍行(普通)列車で牛久に向かった。かほるは生来不平不満を言う子ではなく、後に『橋のない川』を書き続けた母を

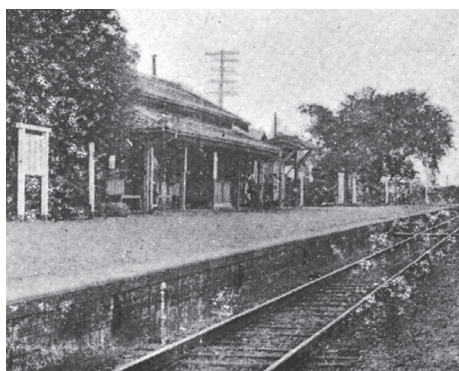
陰でひたすら支え続けた女性だけに、おとなしく列車に乗った。れい子は目の前に牛久沼という大きな沼が広がると聞いて、そこにはロマンチックな響きを感じ、喜んで富士絹のワンピースの袖に手を通したという。充は4歳で初めて乗る列車にはしゃいでいた。列車は2時間余りで牛久駅に着いた。

牛久駅から牛久沼の上の城中までは3km余り。牛久沼の水面を渡ってくる冷風が牛久沼のほとりの道幅の細い農道(作道さくみち)というを歩く彼らのおおをなでた。農道は小高い丘の上まで延びていた。程なく上り詰めるとそこにかやぶき屋根の家があった。それが犬田家の住居であった。犬田家の住居がある小高い丘の真下から南西へと牛久沼が広がっていた。ちょうど真っ赤な夕日が水面のはるかかなたに沈むところだった。住井はその牛久沼が自分にはほほ笑みかけているように思えてならなかった。住井は「牛久沼は、まるで地球のエクボのようだ」と思った。この夜住井はメモ帳に「わがいのち おかしからずや常陸なる 牛久沼辺の土と化らむに」と書き留めた。

北条常久著『橋のない川 住井するゑの生涯』によれば、翌朝、竜ヶ崎警察署の署長



犬田家住宅の写真―広報うしく平成17年3月1日号から転載―



牛久駅舎(昭和40年ごろまで駅を停車場ていしゃばと言った人がいた)および構内

以下10余名の警察官が犬田家の庭先に勢ぞろいしたという。卯一家は、妹のおひで一家が所有していた土地の中から畑5畝、宅地2反1畝11歩、山林1畝20歩を分けてもらった。水田もあったが病弱の卯と農業の経験のない住井には、米作りは無理だった。畑が5畝あれば、あとは米だけ買えば一家6人の食糧は確保できるはずだった。